

市民公開シンポジウム 「歴史から学ぶ感染症への視点」

趣旨説明

渡部 幹夫

順天堂大学

第120回日本医史学会総会(2019年,名古屋)の市民公開講座「移り行く疾病像とその社会医学的対応」で青木國雄座長はその趣旨説明の冒頭に次のように述べている。『医史学研究の目的の一つに、歴史的観察から疾病対策に対する評価や将来の方向を示すことが挙げられる』。同総会の「シンポジウム 医史学の新たな展望—健康長寿社会を拓いた先哲から学ぶ—」の趣旨説明で川寫真人座長は、エドワード・ジェンナー、華岡青洲、伊藤圭介、北里柴三郎をとり上げることが述べている。また第119回総会(2018年鹿児島)にてシンポジウム「人類と感染症の相克・医史学的見地から」が行われた。

それから4年を過ぎて、今総会の町泉寿郎会長は「歴史から学ぶ感染症への視点」を市民公開シンポジウムとして組まれた。2019年末より始まったCOVID-19パンデミックは、地域および国際的な人的交流の制限、早急なワクチンの開発と、世界的に広範な接種によっても、いまだに世界の政治・経済・社会に大きな問題をひき起こしている。それに加えて2022年のはじめに発生したウクライナの戦争は大戦となる不安をはらんで続いている。第二次世界大戦終了後、機能していたと思われる国際連合(UN)や世界保健機構(WHO)の有効性にも疑問符がついている。本学会は東京(2020年)・松江(2021年)の総会はオンライン開催となった。2022年に松山で現地開催された総会への参加者は大変に充実されたものを感じたと思う。今回「歴史から学ぶ感染症への視点」が市民公開シンポジウムとして組まれたことは、この歴史的時代を生きている市民、そして学会員にとって得るところの大きなものとなると期待される。

今回のシンポジウムの講演をお願いした3会員について簡単にその研究領域の紹介をしておきたい。そこから発展した講演がうかがえることを期待している。

加藤茂孝講師はウイルス学・ワクチン学の研究歴が長く、特に風しんウイルス遺伝子検出法により、胎内感染胎児の感染診断法を開発された。感染症史について、今回のCOVID-19パンデミック以前に『人類と感染症の歴史—未知なる恐怖を超えて—』『続・人類と感染症の歴史—新たな恐怖に備える—』を刊行されている。今回のパンデミックそしてワクチンについての講演に期待したい。

柳川鍊平講師は海上自衛隊勤務を経て医学史の研究者となられた方である。戦争を行わない国家としてある現在の日本にあって、自衛隊という軍隊について語られることは日本の学界では現在でも多いとは言えない。しかし第二次世界大戦までの日本の近代化の中で軍人の果たしてきた仕事は大きい。健康を衛生という言葉で語ってきた歴史には大きな蓄積があったし、現在も必要である。練習艦隊という閉鎖社会で世界周航の医務長も経験した講師からは、戦争の現場映像が一般社会のメディアでながれる生活の中で、日本もその外側に居ることの保障ができない今日にあって、医史学的視点からの話をうかがえると期待する。

星野卓之講師は臨床、地域医療の現場から、東洋医学・江戸の日本医学(漢方)の研究と診療にすすみ、現代医学に於ける漢方医学の評価に取り組んでいる総合内科専門医である。2019年にWHOのICD-11(国際疾病分類)に伝統医学が新しい章として初めて採りあげられたが、そのフィールドテストの指揮を執った。これから日本語版が出るとされているが、向後、漢方医学が世界的に科学の世界で論

じられることになる時代に活躍が期待される臨床家の話がいただけると思う。

市民公開シンポジウムの司会を務めるものとしては、博物館を訪ねて得られた次のような展示画像を提示して市民と演者の橋渡しをしたいと考えている。

- ・エドワード・ジェンナー博物館における種痘関連展示物
- ・米国議会図書館に存在する日本の軍陣医学資料
- ・本居宣長記念館展示の江戸時代の医療者像
- ・博物館明治村の感染症関連展示

等